



艦これ

KANCOLLE

メモリアル

MEMORIAL

ひーらぎ

illust 咲

side 夕立

夏

# 艦これメモリアル

- side 夕立 夏 -

ひーらぎ  
表紙・挿絵／咲

## 【目次】

プロローグ	【06】
第1章「Non stop road」	【16】
第2章「駆け抜けて Blue」	【44】
第3章「キミが太陽」	【94】
エピローグ	【136】
あとがき	【138】

## 〈登場人物〉

### ていとく 【提督】

幼い頃から鎮守府島で暮らしている高校3年生男子。  
クラスは3年1組在籍。

島の間人からは何となく雰囲気<sup>ふんいき</sup>がそれっぽい、という理由「提督」と呼ばれている。

しかし本名とは全くかぶっていない。

ちなみに本名は……。

### ゆうだち 【夕立】

鎮守府学園高等部1年1組に所属してる元気娘。

頻繁に提督のクラスに遊びに行くせいか3年生にも知りわたっているマスコットの女の子。

そのため友達も多い。

村雨とは同級生で同じクラス。

しらつゆ  
【白露】

鎮守府学園3年1組に所属している女の子。  
誰とでも友達になれるタイプでかなりの自由人。  
たまに口が悪い。  
白露型の長女だけど長女と思われない。

しぐれ  
【時雨】

鎮守府学園高等部2年生で、白露型次女。  
憂いを帯びた女の子で、どこか冷たいような印象の  
女の子。  
大人しい一面もあるが、よく笑う。  
女の子だけど女の子人気が高い。

むらさめ  
【村雨】

鎮守府学園高等部1年1組に所属する女の子。  
夕立と同じクラス。  
おてんばな夕立とは違い、おしとやかで世話好きな  
家庭的的一面がある。  
最近ダイエットに挑戦中とか。

## 【プロローグ】

暑い……。

暑い、暑い……。

暑い、暑い、暑い……。

とにかくただ、

「暑い」

雲一つない八月の空を見上げながら、もう何度心の中で繰り返したかわからない言葉を溜息みたいに吐き出す。降り注ぐ日差しは容赦なく俺の身体を焼き続け、立ってるだけで汗が吹き出るほどだ。

今すぐにでも数メートル先のオアシスへ逃げ込みたいのに、動くことができないほどかしさはなんなのか。

いや、動こうと思えば動けるけど……。

「約束したし……待ってたほうがいいよな」

オアシス、もといプールから視線を切って反対へ向く。

真っ白なアーチ状のゲートがあつて、中央で分岐するそれは更衣室へ通じている。こうしている今も水着に着替えた女の子が絶えず出て来てはプールへ吸い込まれていく。目が合いそうになる度に俯いて気まずい時間を過ごす。

「早く来てくれよ……」

額から滴る汗が地面へ一滴、二滴、三滴——秒読みで増えるそれを見つめっていると、  
「てーとくさーんっ！」

背中まで伸びる金髪を蹴らせてゲートから駆け出た女の子が一人。

透き通る白い肌は夏とは無縁に思えるかもしれないけど、その笑顔は強烈な太陽の日差しよりも眩しい——そう、夕立だ。

「お待たせっばーい!!」

「走るな走るな！」

危ないし何より、その揺れは高校生男子を殺す威力があるんだぞ!!

声を大にするけど、ニコニコ笑顔の辞書に止まるって文字はないらしい。スピードそのままに両手を広げて、俺へ飛び付こうとしている。

こうなったら仕方ない。諦めて抱き留めようとした瞬間、

「夕立く？」

入場ゲートから新たな女の子の声がやってくる。

二人同時に受け止める筋力が俺にあるのか……？

緊張とよく似た身体の強張りを感じたのも束の間、

「先に行かないでって言ったのに……それに走っちゃダメって注意書き見たでしょ？」

丸みを帯びた声の正体に気付いて、一瞬でそれが解れていく。

呆れ顔でゲートを潜るのは薄い茶髪をツインテールに結んだ女の子、村雨だ。溜息し

たかと思えば、夕立を捕まえようと小走りで近づいてくる。

なんてこった……。

夕立だけでも破壊力が強い揺れがもう一個加わるとは……。

この二人わかってやってるのか？

それとも屋外プールと水着による開放感で本当に無意識なのか？

いや、そんなことを考えてる暇はない。今は抱き止めることを考えて――。

冷静さを取り戻すために深呼吸して顔を上げた頃には、



「っぼい!!」

眼下へ金色の髪があつて、

「遊ぶっぼい〜」

ひまわりみたいな笑顔が咲いた頃——俺の視界へ雲一つない青空がどこまでも広がっていた。蟬の鳴き声は果てのない笑い声の中へ埋もれ、暑かった背中が冷やされる。

そんな最後に目にしたのは夕立の笑顔じゃなくて、このプールの人気アトラクションである竜巻みたいな螺旋を描くウォーターライダーだった。

「んんん!!」

声どころか音にならない悲鳴は泡となって消えていく。

確かに一刻も早く暑さをどうにかしたいと思っただけども!

まさかプールに落ちるなんて考えてなかった。でも経緯はどうあれ気持ちいいことに変わりない。

目を開けると日差しで反射した水中がキラキラしていて、色んな女の子の足がどこもかしこも目に付く。

「……?」

そこへ伸びる二つの手を掴んでみると、一気に水中から引き上げられる。

プールサイドへうつ伏せに転がりながら何度も夢中で咳き込んでいると——ようやくというべきか、くぐもっていた音がクリアに戻ってきた。

冷えた身体は忘れかけていた夏の日差しで温められていき、何とも言えない疲労感が全身へのしかかる。

「はあ、はあ……びっくりした」

「て、てーとくさん」

「へ、平気ですか？」

心配そうに俺を見つめる視線へ挟まれていた。さっき手を伸ばしてたのは二人だったのか。

心配そうに眉を寄せる村雨と、ずぶ濡れの髪もそのままに俯く夕立。この楽しい空間では似合わない顔だ。

「二人共ありがと。ビックリしたけど……でも気持ちよかったわ」

「ほ、ほんとおっほい？」

「こら、夕立。まずは謝るのが先でしょ」

「ほ、ほい……。てーとくさん、走ってごめんなさいっほい」

「はいはい。そんな顔するなって」

呼吸が整ってから身体を起こす。ペコリと頭を下げる金色の髪をめちゃくちゃに撫で回してから、

「へ、へーとくしゃん？」

夕立のほっぺを両方から抑えるようにして無理やり顔を上げさせる。唇が突き出たような間抜けな顔が可愛いけど面白い。しばらくその顔で遊んでから手を離すと、不思議そうな、それでいて不安そうな目のまま首を傾げた。

「怒ってないの？」

「それくらいで怒ってたら俺は毎日何回怒ればいいんだよ……。でも走ると危ないから気をつけてな」

「わかったっほい！ じゃあてーとくさん、一緒に遊ぶっほい！」

萎しぼんでいたような顔が満開の笑顔になっていくのが面白くて、つい夢中で撫でてしまう。すると、その様子を見つめていたであろう村雨と視線が重なった。

何か言いたそうな瞳が咄嗟に困ったようなものへ変わるのを見逃さない。

「ありがとな。でも村雨が気にすることじゃないし、そもそも大したことじゃないから」  
そうして頭へ手を乗せると、困り顔が徐々に解けていった。ぱっちり開く目元が細く  
なり、次第に口元まで緩んでいく。

「てーとくさん、夕立も撫でて、撫でてー」

「今は村雨の番だから諦めて」

「むう……」

口を膨らませる夕立を他所に村雨が自分の頭を俺の手へ擦りつけるようにしてくる。

「提督さんの手、気持ちいいですね」

「そりゃどうも」

冷静に考えて幼馴染の女子高生、それも付き合っていない段階で頭を撫でるのであってアウ  
トなんじゃね？

そんなことが過ぎった瞬間——近くで呆れたような溜息が聞こえた。そっちに意識を  
向けると、自然と撫でる手も離れていく。

「待ち人到来というやつだ。」

「……提督？ 僕らがない時になにしたのかな」

「先に入るなんてずるくない？ あたしが一番でしょ？」

いつの間にかプールサイドへ出てきた二人が俺を見つめていた。

一人は今にも泳ぎたそうな顔をした明るい茶髪をポブ風に揃えた白露。  
もう一人は長い三つ編みを肩へ流した、儂い笑みを浮かべる時雨だ。

「何かとうるか夕立にプールに落とされたところだよ」

「ふーん、そっか。ずるいなあ、そういうのは僕たちがいるところでやってよ」

「ずるいつてなんだよ」

「楽しいのは共有しないとね」

「時雨お前なあ……」

溜息がこみ上げてきたが、自然と口元が緩む。

「そういうことなら……」

「ぼ、ぼい？」

「えっ、な、なになな……」

夕立と時雨の手を握り、そのまま再びプールへ飛び込む。

「て、てーとくさツツツ!!」

「そういうことじゃなッツツ!!」

まるで悲鳴みたいな声の直後、隣で大きな水しぶきが上がった。

そしてそれが合図になったのか、

「そうよね、水中ってダイエットにいいって言うし!」、

「あっ、だから一番はあたしなんだってばー!」

みんなが一斉にプールへ飛び込んだ。

雨のようなしぶきを浴びながら、遠く聞こえるセミの鳴き声を聞いていた。

# 第1章 【Non stop road】

## 1

高校三年にとって夏休みは如何に自分を追い込むことができるかどうかの期間らしい。大学とかの進学へ向けてだったり、就職へ向けてだったり。

それは本島だけじゃなくて、ここ鎮守府学園高等部。それもエスカレーター式で大学まで余裕で進学できちゃうここでも変わらないらしい。

つまりは夏期講習があるからお前ら勉強しろよってことで――。

「深海棲艦との戦争が和平条約により終戦を迎えて今年で……」

大事な時期だし夏期講習もわかる。

わかってる、わかってるけど！

それでもやっぱり退屈なのはどうかできるものじゃない。まるで俺の考えへ賛同す

るように、前の席の白露は机へ突っ伏して爆睡中だ。俺の真横に座る愛宕さんをチラ見しても眠そうにしていた。

周辺だけ軽く見てもこうなってることは、他に寝てる奴がいてもおかしくない。

そんな状況に気付いているのかどうか、黒板を背にした羽黒先生の授業は続く。

「私たち艦娘が実戦投入されることは最後までなかったけど、少しでもタイミングが悪ければ……。きっと私も先生にはなれなかったと思います。そしてあなたたちみんなも深海棲艦と戦う兵器となって海に出ていたでしょう」

その言葉が夏空に響く蟬の声をかき消すように静かに波紋を打った。次第に申し訳程度に聞こえていたノートを取る音も途絶えていく。

完全な静寂だ。

「あ、あれ？ ご、ごめんなさい。空気を重くしたかったんじゃないんで、あなたたちは兵器としてではなくひとりの人間として自由に生きられる。自由を掴むためには勉強は大事ってことを伝えたくて……」

艦娘ばかりが暮らすこの島において普通の人間で、男の俺は完全イレギュラーな存在だけど想像くらいできる。



戦争の悲惨さ、というか今までの楽しいことがなかったとしたら——そう考えると誰だって気分が重くなる。

だから羽黒先生、頑張ってください。

遠のく眠気と合わせて顔を前へ向ける。

「えっ、もう時間ですか!？」

間もなくして授業終了のチャイムが教室の隅々にまで鳴り響いた。途端に緊張が解けたのか、誰かの緩い吐息が落ちた。

それが何かのスイッチを切り替えたかのように、眠っていた教室がざわつき始める。

その様子をしっかりと見てたであろう羽黒先生が少し残念そうに教科書を閉じた。

「じゃあ続きは明日ですね。今日やった箇所はキチンと復習しておいてくださいね。重要な部分ですから」

萎<sup>しぼ</sup>むように呟いた羽黒先生が教室の扉から出て行った。

あつと言う間に賑やかになる中、

「あ、起きた」

「……うん」

俺の前で爆睡してた白露が糸を引かれたように顔を上げた。ゆらりとこちらへ半身になつた彼女の目は焦点が定まっていな。口元もだらしなく半開きだ。

「あの寝方はまずいだろ」

「まあ……」

ダメだこいつ、まだ起きてない!!

言いかけた言葉の行方がわからないまま数秒が経過。

「あらあら……だらしないわよ?」

見かねた愛宕が席を立って白露の後ろへ回つた。その手にはヘアブラシが握られており、問答無用でボサボサの髪を梳かし始める。サラサラと心地いい音に合わせて、目覚めて間もないのに白露の頭がうとうと揺れだす。

学校でよくそんな寝れるよな……。

授業が終わって二分程度か。

「そろそろか」

なんとなしに眩くと、愛宕が手を止めて教室前方の扉へ振り向く。

「いつものかしら?」

「お馴染みのアレ」

「懐かれてるわねえ」

「昔からだし……習慣なんだろう」

口元へ苦笑を作った途端、

「せんばーい!!」

教室の扉が勢いよく開け放たれた。

わかりきってる相手だけど視線はそちらへ向くも——そこには誰も立っていない。代わりに入口傍が一瞬の賑やかさに包まれていた。

「夏休みでも相変わらずなのね」

「提督また来てやがるぜ!!」

「もう私たちと同じクラスになっちゃえばいいのにねえ」

あちこちから聞こえる声へ溜息し、ゆっくり席を立つ。

縦八列、横六列で並ぶ机の隙間を縫うように、楽しげに紺色のセーラー服のスカートと金色の髪が踊っていた。

いや、踊るなんて優雅なものじゃないかもしれない。

もつとこう、なんて言えばいいのか。

例えるなら飼い主を見つけた犬が一目散に駆け寄ってくるような荒々しさだ。

「遊びに来たっほーい！」

目が合った途端、笑顔にキラキラ輝いた。

「ちよ、夕立ッ!？」

勢いそのまま俺の腹へ頭から突っ込んできた。お腹へ強い衝撃が走り——受け止める準備が整ってなかった身体は綺麗にひっくり返っていた。

「ちゃんと受け止めて欲しかったっほい」

当たり前馬乗り状態で俺を見下ろす夕立を退かそうとする。けど、お腹のダメージでそれどころじゃない。

「なんで今日はいつもより勢い付けたんだよ」

「そ、そうだったっほい……?」

エメラルド色の両目は笑ったまま、きょとんと首を傾げる。だが次の瞬間には何かを思い出したように目をつむり、口元をふむふむと緩ませる。

「実はビックニュースっほい」

跨ったまま楽しそうに上下へ跳ねる。

果たして本人に自覚があるのか。十年以上昔からの幼馴染でもう家族と言っても過言じゃない夕立だけど、

「なんだと思う、なんだと思う〜?」

たゆんたゆんと揺れる胸を見せられて平気な高校生男子はどこにもいないんだ。高校に入ってからここまで凶悪なものを育てるとは。

「…:補習が終わったとか?」

平静さを装って訊くも、夕立の首は横へと動く。

「違うっ。ぼい。てーとくさん…:じゃなかった。せんばい真面目に聞いて欲しいっぼい」

「別に無理してせんばいじゃなくていいのに。まあいいや、というか、そろそろ降りてくれ。背中が痛い」

「ぼい〜」

夕立が白露の髪を直したりと世話を焼く愛宕の席へ座った。

「愛宕せんばい、席借りるっぼい」

「はーい。提督、夕立ちちゃんに優しくしないとダメよ?」

「優しいと思うんだけど……。それでニュースって何？」

「ニュースじゃなくてビッグニュースっぼい！」

「そのビッグニュース。もしかして宿題が終わってないから助けて、とかじゃないよね？」  
あ、あははは……。

夕立の目から光が消えた瞬間だった。

同時にそれは夏の暑さを忘れさせる毎年恒例の地獄を彷彿とさせる。思い出すだけでも嫌な汗が背中へ滲んできそうだ。

「流石に今年を受験生だから手伝えないからね」

「ワ、ワカツテルッポイ。ってそうじゃなくて、実はね、実はね！」  
前屈みになりながら片手でセーラー服の胸ポケットを触った。

「じゃやーん！ 当たったっぼい！」

勢いよく引き抜かれたものが天高く掲げられた。

すごいでしょ、褒めて褒めて！

声になってなくても聞こえる得意顔だけど、俺の手へ渡ったのはレシートサイズのカラフルなカードだ。

「えっと……。会計時三十円引きクーポン……。コンビニのだな」

「えっ、違う。そっちじゃなくて……」

今度はスカートのポケットに手を入れて、

「あ、あれ……?」

どうしてポケットを探すだけなのにぐるぐる回ってるんだ……。

自分の尻尾でじやれる犬みたいだ。

「なに探してるの?」

そんな光景が数分続いてもなお、目当てのモノが見つからないとなると落としたとかじゃないかな。

「えっと……あれ、ないっぼい!」

「走ってきたんでしょ。落としたとか……?」

「かもしれないっぼい……」

はあー。

いつもニコニコ笑顔で、不機嫌になってもすぐ回復する。そんな夕立からは考えられない悲哀に満ちた吐息が落ちた。

相当楽しみなもので、俺に見せたかったってことか。

「俺も探すから、なっ？」

「せ、せんぱーい……」

俯く夕立の肩へ手を置いて下から顔を覗き込む。金色の前髪が隠す瞳は今にも泣き出しそう。

「こういうのは大体落ちてるか……カバンの中に入ってるもんだから」

「ほんと？」

「ああ。それに誰か拾って届けてくれるかもしれないだろ？」

だから元氣出せって、ポンポン肩を叩いていると——先程とは打って変わっておとなしめに教室の扉が開いた。

「失礼します……」

礼儀正しくお辞儀をして入ってきたのは栗色のツインテールが特徴の女の子。夕立と同じ紺のセーラー服を着ているが、その顔は少し大人びている。

そう、村雨だ。

「ど、どうした？」



「せ、先輩……失礼します。やっぱりそこにいましたね」

はあ、はあ。

乱れた呼吸のまま俺の席へ来るなり、そのまま縁<sup>ふち</sup>へ手をつけて呼吸を整え始めた。

「先輩のところに行くなら一緒に話したじゃない」

「お疲れ。毎回走ってきて大変だな」

「ほんとですよ。足柄先生が凄く怒ってて落ち着かせるの大変だったんですから……」

「ああ、村雨。聞いて欲しいっぼい。てーとくさんに見せたかった——」

「それならここにあるわよ。放課後まで預かってるって約束したじゃない。一緒に提督に見せに行こうって夕立が言ったのよ？」

「ああ！ そうだったぼい！」

「なのに先に行って……」

「うう、ごめんなさいっぼい」

そう溜息した村雨が夕立へ何か手渡したらしい。

封筒みたいに見えるそれだが、夕立は受け取ったものを確かめた途端、雲の隙間から日差しが差し込んだような晴れ晴れとした笑みを取り戻した。

「これっほい！ せんばい、これ夕立が当てたの！」

そこから取り出されたものは――。

「一緒に行くっほい！」

窓越しに聞こえる蝉の鳴き声にも負けない「夏」そのものだった。

2

陽が沈みかけて暑さが弱まる帰り道。

学校から少し離れれば途端に住宅街に差し掛かる。それもマンションなんかじゃなくて、少し古めの戸建てが並ぶのどかな通りだ。

丁度夕飯時で、色んな匂いが夏の香りと混ざり合ってる。これがノスタルジックって感じなのかも知れない。

そんな僕らの少し先を楽しげな鼻歌を漂わせた夕立が歩いている。

「てーとくさん、いつプール行くっほい？」

片手でひらひら風に踊るチケットは、先程見せてくれたアトラクションプールランド

の招待チケットだった。

有効期限は今年の夏休みいっぱい。

俺は行きたいし、その気だけど——それには避けては通れない問題が一つ。

「……課題は終わってるの？」

そう、これに尽きる。

「僕は平気だよ。もう終わってるから」

「私も……少し残ってますけど問題ないですねえ」

「あたしは終わってるし！」

隣へ並ぶ時雨、村雨、白露が合わせたように返事をする。

特に心配はしてないメンツだけど、そんな中、

「ぼ、ぼい？」

やはりというべきか、先を歩いていた夕立がピタッと足を止めた。

「え、えへへへ」

引き攣った無理な笑いで全ての答えを察してしまう。

時雨や村雨、夏期講習中は絶賛爆睡してた白露でさえも課題を終えているのに……。

「夕立、正直に言つて」

「え、えつと……まだっぼい」

夕陽を綺麗に反射させた緑色の瞳が視線の行き場を失ったように凜いでいる。やはり毎年恒例は毎年恒例。今年も安定つてことか。

ああ、全く頭痛がしそうだ。

「話した通り今年は流石に手伝えんぞ……。一応受験生だし」

「そ、それは……！ てーとくさん。せんぱいパワーでどうにかならないっぼい？」

「ならないっぼい」

「村雨、課題見せ——」

「だめよ。教えるならいいけど見せたら意味ないでしょ」

ツインテールを片手で払いながら村雨が呆れ気味に息をつく。

「僕も教えるよ。去年の範囲なら復習にもなるしね」

「困つてるならあたしも手を手伝うから。まだ夏休みは残ってるし！」

「……が、がんばるっぼい」

しよぼんとした顔で呟いたが、

「でも提督さん、プールは行けるよね？」

「課題次第だな」

「一緒に行ってくれたら頑張れるっばい！ だから、ねっ？ いいでしょ？」

さっきまでの残念そうな顔はなんだったのか？

俺の右腕へ抱きついて、ジッとこちらを見つめてくる。

黙っていれば人形みたいな美人顔だから正直こういうのは困る。

幼馴染とはいえ——いや、幼馴染だからこそかもしれない。

「それに……」

なにを言おうとしたのか、夕立が急に目を逸らした。でもその先はいつまでも訪れず、  
気付けば先ほどみたいに鼻歌交じりで歩き出した。

それが気がかりだったけど、

「……提督さんはこれから忙しくなるし。いっぱい遊びたいっばい！」

ほんの少しの間を置いて、その答えは簡単に返ってきた。

今の僅かな間の正体が気になるけど、今さら聞くのもなんか違う。何より、俺自身が  
言わなきゃいけないことにも繋がってくるのだとしたら……。

今年の夏はその呪いに付きまとわれるみたいで口にできない。

「だからプール行くっぽい」

住宅が立ち並ぶ通りから商店街へ差し掛かろうという頃に、こちらへ振り返って笑った。昔から変わらない警戒心の欠片もない無邪気な笑み。

どうも昔からこの顔に弱い。

「どうするのかな、先輩？」

「べ、勉強なら私たちがちゃんと見ますから。ね？」

「そうそう、あたしもだけど提督もここからでしょ？ ならパーっとさ」

そしてそれは多分、この三人も同じことみたいで、

そんな空気にされたら断るのも難しいじゃん。

どうしたもんか、時雨の方へ目をやると肩へ流していた三つ編みを触りながら首を斜めにした。

「もしかして僕らが信じられないかい？」

その挑発的な笑い顔もずるい。

白露なら適当に受け流がせだし、村雨に挑発は無理だ。

「昔から僕たちのこと知ってる提督なら信じてくれると思ってたんだけど……」

「お、お前な……」

「僕は悲しいよ」

わざとらしく片手で目尻を押さえやがって……。

「……その代わり、課題の手助けはしないからな」

まあどっちにしろこの空気が断れないし、仕方ないだろ。

俺だって夏は遊びたいんだ。

「だってよ夕立。よかったね」

「やっぱ泣き真似だったのかよ！」

「ん？ なんのことだい？ ただゴミが目に入ったただけけど……」

「クツソ……ああもう、ホント……今年も課題手伝えないからな」

「もちろんちゃんとやるっほい！ だからーとくさん」

スニーカーの音が勢いよくこっちへ向かってきて、

「プールといえば水着！ 一緒に買いに行っっほい！」

夕立が再び俺の胸へ飛び込んできたのだった。

翌日の夏期講習後。時刻は十七時を過ぎた頃だろうか。

学園から数駅離れたところにある、島唯一の大型ショッピングモールは溢れんばかりの人で賑わっていた。

見渡す限り女性ばかりで、学園でよく見る艦娘も多く目につく。

さすがは夏休みなのだ——改めて男の少なさに寂しさみたいなものを感じてしまう。

「なあ……俺も行かないとだめか？ よく考えてくれ。俺は男だ」

「知ってるっばい」

「かしこいぞ！ 男がここに入ったらどうなるか考えてみよう」

無邪気な瞳で俺を見ていた夕立が首を傾げた。棚やラックに飾られた大量の水着で彩られた店内とこちらへ交互に目をやったかと思えば、

「問題あるっばい？」

傾げていた首が反対へ傾く。



途端に溜息が喉元まで上がってくる。深呼吸をしてそれを誤魔化した。

「女の子ばかりいる場所。それも売り場に男がいるって……変態だと思われるだろ。それはまずい」

「心配いらないうっほい。夕立もいるし、時雨も村雨も白露も。みんなてーとくさんのこと信じてるっほい！」

「で、でもなあ……」

夕立たちは平気だとしても、他の人がそう思ってるかどうかは別問題なわけで。

店に入るほんのわずかな一歩がやけに重たい。先に入った白露、時雨、村雨の姿はもう見えない。きつと今頃三人でどれがいいか楽しそうに選んでいるんだろう。

「夕立も三人のとこ行きなよ。俺はここで——」

「だからそれじゃ意味ないっほい！ てーとくさん行くよ」

「えっ、ちよ!？」

瞬間、袖が強く握られたかと思えば、

「お買い物っほい」

「やめっ！ 俺はまだ警察の世話にはなりたくないんだ！」

「大げさっばい」

そのまま袖を引かれ——ついに俺は抵抗虚しく女性たちで埋め尽くされた水着売り場へ踏み込んでしまった。

一步。たった一步踏み込んだだけなのに、センサーのように反応してこちらへ向く視線が痛い。

「な、なあ。やっぱりまずいだろ……」

「それはもう聞き飽きたっばい。それよりてーとくさんはどうなのが好き？」

店内に入ってすぐ近くにある背の低いラックから選び始めた。なるべく色んなものを見ないよう俯いて自衛へ務める。

心の中で自分は無害だと叫び続けてはいるが、

「高校生になったしせくしーろせん？ とかいいかなと思うっばい！ てーとくさんはどう思っばい？」

どうしても隣の夕立は視界から外れない。手に取ってる水着に何とも言えない気まずさを覚えてしまう。

だってこういうのって付き合ってる男女がやることで、幼馴染同士でやることじゃな

いと思うんだよ……。

「てーとくさん？」

「……なんでもいいと思う」

「だめっほい！ 夕立に似合うのどれ？」

袖をグイグイ引っ張られながらの声に、周囲の視線が更にキツくなった気がする。

背中に嫌な汗が滲む。

このままじゃよからぬ噂を立てられてもおかしくない。

だってこの島の男は本当に数えられるくらいしかいなくて——高校生ともなれば俺だ

けなんだから。

「わ、わかったから。ちゃんと考えるから……」

これ以上注目を浴びないためにも、ここは仕方ない。

深呼吸を一つ挟んで、上目遣いでこちらを見つめる夕立を観察。

女の子の平均身長がわからないけど、たぶん少し低い方に入る気がする。でもそれは身長の話ってだけだ。高校一年生という枠で考えればとんでもない物を持っているのは間違いない。

紺色のセーラー服の胸元はデザインがゆったりしているのもあって主張こそ控えめだが、よく見ればそのポリウレーム感は伝わってくる。

手も足も長くて――。

「てーとくさん？」

「えっ？」

「ジツと見られると照れるっほい……」

「一応真面目に考えてただけ……」

「だけど？」

期待に満ちた目で見つめないで欲しい。

そもそも女性水着に詳しくないというか、センスがないというか。

さつきから必死に考えてはいるけどいいのと思いつかない。

「え、えっと……」

「うん！」

「……す、好きなのでいいんじゃないね？」

「もお真面目に考えてほしいっほい！」

夕立がむっと頬を膨らませた。両手をブンブン振るたびに、セーラー服がたなびいてゆったりした生地へ確かな畝うねの形を作る。

でもきつとそういうのに一切気付いてないんだろなあ……。

鎮守府島の男が少なくて本当に良かった。東京とかに行ったら間違いない変な男に絡まれるぞ。そしてほしいほしい着いて行きそうで心配になる。

「言い方が悪かったな。夕立ならなんでも似合うって意味だ」

「ほんとうっほい？ でもてーとくさんが選んだ水着ならもっと楽しくなるっほい！」

「とは言ってもなあ……」

肝心の俺のセンスがないんじゃないやどうしようもない。

もう諦めて店員さんと呼んでアドバイスをもらった方が賢いか？

俯き気味だった視線を天井まで持ち上げて、音にならないよう嘆息した途端、

「夕立、提督を困らせちゃダメなんだから」

「村雨の意見はもつともだけど、僕としては提督の好みを把握しておきたいかな」

「とかさつきからなに騒いでるの？ みんなこっち見てるんだけど」

やけに騒がしくなまって振り返ってみると、先に行ったはずの三人が並んでいた。

呆れたような顔をしたり、もしくは何か楽しみにしているような曖昧な笑みを浮かべて。更には注目されている現状が面白いのかやけにテンションを上げてみたり――。

俺としては気まずい空間から究極に居心地の悪い場所へランクアップした瞬間だ。

「まあ……水着は男が選ぶよりみんなで見決めてほうがいいだろ？ せっかくみんな迎えて来てくれたんだし」

「んー、ならみんなの分をてーとくさんが選ばば解決っぽい？」

口端へ人指し指を当てながら首を斜めにした。

俺へ向いたままのエメラルド色の瞳が期待に燃えている。

「僕は賛成だよ。提督ならきつとこの夏にふさわしいのを選んでくれるはずだからね。そうだよね、提督」

「……」

「だめ、かな？」

何か言葉で返したら無理やり肯定に捻じ曲げられそうな空気だったし、あえて沈黙で意思表示をしてみる。

「そっか……提督は僕らとプール行きたくないんだ……」

「……」

「無理させてごめんね」

「……」

「あの……僕らのことは気にしなくていいから」

「ただど沈黙さえ無駄らしい。」

俺の服の袖をちよいちよい引っ張りながら、憂いを帯びた両目が見つめている。

「……わかったよ。そういうのセンス無いから後悔するよ？」

「後悔なんてしないさ。僕は提督との思い出を増やしたいだけなんだから。夕立がそれを一番強く思ってると思うよ」

「変にプレッシャーかけてくるのな」

「そんなことないさ。提督を……いや、先輩を信じてるってだけさ」

「それを世間ではプレッシャーって言うんだよ」

苦笑する唇が嫌に引き攣る。

だが、そんなはしゃぐ三人を他所に白露は難しそうな顔をしていた。

「そもそもなんで提督は選ぶの嫌なの？」

「えっ、そこから!? 普通に嫌だろ? だって付き合ってるわけでもないのに」

「提督だし今更感あるんだけど……。提督が選んだ水着をあたしたちが着る。つまり選  
びたい放題ってことなんだけど」

白露が含むような口調で言う。彼女の背後にはなんか明らかに紐にしか見えない水着  
が壁に飾られているせいもあって、卑猥じゃないのにそういう風にしか聞こえなかった。

「ったく……」

でも確かにみんなとこうして遊べる時間は残り僅かなのかもしれない。

受験に入れば嫌でもこんな時間はなくなってしまう。

そして俺の進路は――。

「選んでみるから……。ちゃんと夏休みの課題は終わらせるって約束な」

屈むようにして正面の夕立と視線を合わせてみる。

少し俯き気味だったエメラルド色の光が煌めくように向いた。ぱあっとひまわりみた  
いに咲いた笑顔にこっちまで楽しくなる。

「約束するっほい! やったあ、てーとくさんと水着っほーい!!」  
勢いをつけるように屈伸して俺へ飛びついてきた。



左右には時雨と村雨。正面には夕立。

「早く選びに行こうよ。みんなに一番似合う水着、選んでくれないとダメだからね」

「あ、ああ」

「えへへ、てーとくさんに選んでもらうのうれしいっぽーい」

「提督はどんなのが好きなんだい？ きっと期待に応えてみせるよ」

「村雨だって提督の期待に応えますよ！ あっ、でもお腹が丸見えなのはちょっと……」

三者三様、いや、四者四様とでも言おうか。

全く違うリアクションを色んな方向に受けながら、店の奥へと足を進めた。ちなみに入り口近くでぐだぐだやっていたのもあって女性客と店員の注目を余計浴びている気がするのは——まあ気にしない方向でいこう。

「ん……？」

そんな思考の中、俺の視界はある水着を捉えた。

『よろづ屋本舗』  
明暗異色のライトノベル販売サークル

艦これメモリアル  
- side 夕立 夏 -

ひーらぎ  
表紙・挿絵／咲

**砲雷撃戦！よーい！52 戦目！で頒布予定！！**

『よろづ屋本舗』



<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>

本やサンプルの感想、ご意見等も歓迎です！  
ホームページや著者の Twitter 等に送っていただければ幸いです！

サークル代表：ひーらぎ (@rag0311)

# 艦これメモリアル - side 夕立 夏 -

発行者：よろづ屋本舗

HP：http://yorodukatudouji.dou-jin.com

Email：yoroduyahonpo@gmail.com

著者：ひーらぎ (@rag0311)

イラスト：咲 (@saku39sann)

装丁デザイン：船木渡（船木同人ワークス）

編集：黒ねこ作 (@gretelproject)

これはサンプルです。完全版ではありません。

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複写(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。